■研究ノート■

# 新作能「ルター」(試作)の意味

上　村　敏　文*

## はじめに

新作能をしかも宗教改革者ルターをモチーフに取り上げることは，一般には唐突のように思われるかもしれない。しかし，能楽の歴史，そしてその内包する無限の可能性に触れるにつけ，その試みは決して新しいものではない。観世流宗家である観世清和氏によると，いわゆるキリシタン時代には数多くのキリスト能が創作されていたそうである。残念ながら江戸時代の厳しい禁教においてすべて詞章は散逸し，現在蔵書の中には一つも残っていないそうである。願わくは，宣教師達が報告した中に残されていないかの調査が今後行われることがおおいに期待されるところである。

伝承によれば，今日大宰府に残る幸若舞による形態でミサが行われていたとのことであるから，宣教師たちが京都に教会，セミナリオンを創設していた安土桃山時代においては，今日とはおそらく異なる発声で司祭と信徒間の交唱が行われていたことであろう。また近年ガラシャ夫人にまつわるオペラがウィーンで発見されたことが報道されていた。このような偶然の発見がおそらくはヴァチカン図書館などには残されている可能性が少なからずあると思っている。

＊Uemura, Toshifumi
ルーテル学院大学准教授（キリスト教学科）

## 近，現代における新作能　「ワーグナー的興奮」

ところで，現代において，新作能は法政大学能楽研究所の調査によると，1904年から2004年の間に創作された新作は316曲にものぼる。現行曲が300曲程度であることを考えると実に多い。実際には網羅されていないものを含めるとさらに多くなるであろうし，2004年以降も新作は作られ続けている。

能楽は神，男（修羅物），女（鬘物），狂，鬼とさまざまなジャンルを内包しており，その演劇表現としての可能性は非常に大きく，多岐にわたっている。過去の創作されたもので，外国の作品を扱ったものとして目を引く作品は，「クレオパトラ」(1941)，「復活のキリスト」(1957)，「使徒パウロ」(1960)，「復活」(1963)，「女と影」(1968)，「半獣神の午後」(1974)，「イエズスの洗礼」(1987)，「鷹の井戸」(1990)，「安土の聖母」(1990)，「トマス・ベケット」(1997)，「高山右近」(1997)，「ジゼル」(1999)，「日輪月輪」(2000)，「クレオパトラ」(2000)，「内濠（うちほり）十二景あるいは二重の影」(2001)，「庭上梅」(2001)，「ベルナルダ・アルバの家」(2002)，「始皇帝」(2003)，「能・ハムレット」(2004) などがある。また，近年免疫学者の多田富雄氏の「原爆忌」(2004)，「長崎の聖母」(2004) も注目を集めた。

人生はすべて出会いによって選択，決定される

といっても過言ではない。多田氏が学生時代に出会った橋岡久馬氏の「高野物狂」（世阿弥作）は強烈なインパクトを霊的に与えた。おそらくはこの体験が晩年に自身で創作をしようとされた原動力となったのではなかろうか。「現代，古代，神話の世界を自由に行き来し，悲しみ，喜び，祝言のメッセージを伝えることができるのは，能ならではの時空の劇の世界」（多田富雄，石牟礼道子共著『言霊』藤原書店，2008，p. 144）とし，「ワーグナー的な興奮」という表現を使用している。

筆者の場合も能楽との関わりは一つは，無名の神道家を通してイエス・キリストと出会ったこと，そしてもう一つは人間国宝となられた大鼓の亀井忠雄氏の舞台であった。この二つの出会いが根底にあり，キリストを日本文化の土壌にあって表現してみたいと思ったことが背景にある。

1988年，筆者がヴァチカンに随行した際，古代遺跡の跡地に建造されたアルジェンティーナ劇場，ヴァチカン宮殿謁見の間他で公開された新作能「イエズスの洗礼」（門脇佳吉氏創案）には，おおいに啓発を受けた。その後「世阿弥とイエズスの会」が上智大学東洋宗教研究所内に創設され，さまざまなジャンルの専門家が集まり交流した。その中にいた加賀乙彦氏も「高山右近」を創案し，能楽と西洋音楽の合体という新機軸も打ち出された。

観阿弥，世阿弥父子がいわゆる能楽の形式を確立したのは15世紀中葉，3代将軍足利義満の頃である。花伝書によるとその起源は聖徳太子に遡る。またその始祖としては秦一族が関係している。大倉流家元大倉源次郎氏によると，その系図にはミドルネーム的に「秦」の文字が刻まれている。続日本紀が指摘するように，飛鳥の時代にあってはいわゆる渡来人が「十に八，九」は大陸は，朝鮮半島からの渡来民であったことからすると，7，8世紀に何らかのルートで能楽の原型となるものが流入してきたことは間違いのないことであろう。歴史家の泰斗網野義彦氏の晩年，特に力説されておられたのが「日本」という国家のアイデンティティーであった。いわゆる「日本」という国号がいつ決定されたのかは，歴史の教科書には掲載されていないし，学校教育では教わる機会がないことである。いわゆる縄文時代から弥生時代への移行は，日本列島への移民の歴史と共に重層的になされてきた。この研究はいわゆる古神道と神社神道の形成史を丹念に行うことにより，今後明らかにされていくことであろう。正倉院に保管されている数々の目録を拝見するに，いかに古代日本が海外と幅広く交流し，国際的であったかが彷彿される。たとえば昨年14年ぶりに公開された蘭奢待（らんじゃたい）は，やはり聖徳太子の時代に淡路島に漂着したことが日本書紀推古3年の記録に残されている。また，竪琴も東回りですでに保管されていた。

本研究ノートにおいては，今後古代，中世から近現代にいたる日本の膨大な研究成果を随時発表していくつもりであるが，今回は，まずは現在試作を続けている新作能「ルター」の公演記録と詞章の抜粋を記録しておきたい。初回は，稔台教会の栗原牧師の要請で，自作自演を行った。形式は複式夢幻能である。後場は「小鍛冶」の詞章と教会讃美歌450番を使用した。2回目は京都の国際日本文化研究センターにおける公演（2012年2月17日）であるが，こちらは現在能の形式である。

## 1．原作（複式夢幻能の様式）

場　所：稔台教会

日　時：2010年10月31日（初演）

曲　種

巡礼の修道僧の旅枕に，老形のルターが現れる。ラテン語でキリエ　エレイソン，クリステ　エレイソン（主よ憐れみ給え　キリストよ憐れみ給え）と，登場する。

手には十字架，そして雷鳴が轟いている（今回は鼓なし。実際には大鼓で激しい雷鳴を表現し，雷の体験を予感させる）。救い，罪についての問答が繰り返される中Instructio summaria（一般指示書）という一言が贖宥券に対するルターの怒

りを喚起し沈黙を破ったことが象徴的に表出される。そして,「信仰のみ」Sola Fideという宗教改革の中での最も重要なテーマが繰り返される。

中入りの後, 笛の音の中に, 在りし日のルターが「神歌」と共に登場する。後場は, 若々しいルターが顕現し力強く舞い, 謡い賛美歌四五〇「信仰の戦い」がパイプオルガンの大音響と共に歌われる (今回は省略, 謡のみによって表現)。

| | |
|---|---|
| ワ　キ | 上村　敏文 |
| 前シテ (老人) | 上村　敏文 |
| 後シテ (ルター) | 上村　敏文 |
| 笛 | 海松ふみえ |

ワキ僧：これは諸国一見の修道僧にて候。我いまだ都を見ずそうろう程に, これより足を運ばんずると存じ候。いそぎ候ほどに, はやヴォルムスに着きて候。

前シテ：キリエ　エレイソン　クリステ　エレイソン。キリエ　エレイソン　クリステ　エレイソン。

ワキ僧：不思議やな。あれに見えるはいかなるひとにてぞんじ候。十字を手に持ち, 雷 (いかづち) を従う。

前シテ：月日は百代の過客, 海は俗世, 変転流転を繰り返す。嵐は闇の世にあり, 光はいずこにあらん。光はいずこにあらん。救いはいずこに, あらん。救いはいずこにあらん。

ワキ：　救いはキリストにあり。

前シテ：肉の虜となりしアダムは罪の中にあるのか。

ワキ　：すべての罪はキリストにより赦されし。

前シテ：Instructio summaria[1)]

ワキ僧：これは, いかなることにて候か。

前シテ：懺悔 (さんげ) は煉獄にありても功徳はあらん。権威はいかなるところにありしや。巡礼はいかなるものにて候ぞ。赦しはいずこにあらん。

ワキ僧：行ないによらず, 信仰のみ

前シテ：Sola Fide Sola Fide Sola Fide

(中略)

中入り　　笛

シテ　：ちからなる　神は　わが強き　やぐら

地謡　：力なる　神は　わが強きやぐら　悩み苦しみを　防ぎまもりたもう　悪しき敵の手立て尽し　攻め来るも　なにか恐れんなにか恐れん

後シテ：いかで頼むべき　わが弱きちから

地謡　：神のことばは　かたく世に立ちて　み霊とたまもの　わが内に　溢る　わが内に溢る

後シテ　願わくは[2)]

地謡　：願わくはルーテル, おのれの功名にあらず, 普天率土の勅命に依れり, さあらば」十方恒沙の諸神。ルーテルに力を合わせて賜びたまへとて, 十字架を胸に捧げつつ, 天を仰ぎ, 頭 (こうべ) を地につけ, 骨髄の丹誠聞き入れ納受せしめ給へや

ワキ　：謹上再拝

地謡　：いかにやルーテル, いかにやルーテル。頼めや頼めただたのめ

後シテ：童男壇の上に上がり

地謡　：童男壇の上に上がって, ルーテルに三拝の膝を屈し

後シテ：ちやうと打つ

地謡　：ちゃうちゃうと打ち響きたる雷 (いかづち) の音, 天地に響きておびただしや

ワキ　：かくて九十五ヶ条打ち立てまつり, 表にルーテルと記したり

後シテ：神體時の弟子なれば,

ワキ　：ルーテルとは

後シテ：これなれや

後シテ：我, ここに立つ

地謡　：インダルジェンティス (贖宥), 悪魔世に満ちて　襲いせまるとも　この世の君狂いたてど　何を恐れん　頼むべきはわれにあらず　ただ神の恩寵のみ
万軍の主なる神　万軍の主なる神　神の国は　なおわれのもの[3)]。

## ２．改作第２稿（現在能の様式）

シテ　：上田公威　シテ方観世能楽師
ツレ　：上田拓司　シテ方観世能楽師
地謡　：上田大介　シテ方観世流能楽師
笛　　：竹市　学　藤田流笛方

語り１　雷の体験，塔の体験等（上村）

ツレ　：これは，羅馬より参りたる使者にて候。さても今参ること余の儀にあらず，迷える人々を救わんがために参り候。ここに免罪符というものあり。免罪符を召され候へ
シテ　：キリエ　エレイソン（主よ憐れみ給へ）クリステ　エレイソン（キリストよ憐れみ給へ）
キリエ　エレイソン　クリステ　エレイソン
シテ：　主にありて救われるとは，いかなることにて候ふぞ
ツレ　：免罪符によりてこそ救われん
シテ　：何事にて候か。そもそも免罪符とはいかなるものにて候か。
ツレ　：罪赦され，免罪符　天の扉を開かん　憂き世の中に　とく出でて　先考先比　諸共に　黄泉に堕ちし　すべてのもの　焦熱地獄に喘ぐ諸人（もろびと）　即座に救われん
シテ　：義　こそ救いの道なり
ツレ　：笑止なり。黄金により，汝も，祖霊も天の道にいたらんぞ。死せる者，罪の者はこの赦免によりて　罪赦され　煉獄の苦しみから　のがるること　あたはん
シテ　：謹み　敬ひて申す。　血に贖（あがな）われし　十字架は　いずこにぞあらん　神のみことばは　クリストに　あらわれたり
地謡　：聖骸布を拝め　聖遺物をあがめよ　文字（もんじ）の読めぬ　賤しき者たちには聖なる書物も　なんとせん　黄金（こがね）を　天に高く積み　功徳のまことを捧げ　花のうてなの　天を衝く　尖塔建て　鐘　打ち鳴らし　生きとし生けるものまた　すべての死せる者　高らかに　天の御門（みかど）に　諸共に　入らん
ツレ　：聡（さと）き者なく　義なる人もなくみな迷ひて　相共に　空しくなれり。今はただ免罪符を求め　神の御救いにあずからん　舌には　詭計（たばかり）　口唇（くちびる）のうちには　蝮の毒あり律法（おきて）をおこなふ者のみ　義とせらるべし。羅馬（ローマ）の　御座（みざ）の言葉こそ　偽らざる　真実なり
シテ　：信仰のみ
地謡　：信仰のみ　信仰によりてこそ　天の恵みを　受けにけり　その古（いにしへ）の伝えに，いわく　狭き門より　入れとぞ　大伽藍を建てんがための勧進は　天の御旨に非ず　人の義とせらるるは　律法（おきて）の行為（おこなひ）によらず　ただ　天の　恵みに　あらんずるぞ
シテ　：神の仁慈（なさけ）　汝を　悔改（くいあらため）に　導くを　知らざるか　その義（ただ）しき　審判（さばき）の顕（あらわ）るる　怒りの日に及ぶなり
地謡　：羅馬（ローマ）を　恐れ　秩序を知るべし　すべて　財宝（たから）を天に積むものには栄光と平安あれ　ただただ　勅に従へ　義（ただ）しき人なし　一人だになし　されば知れ　義なる人は　信仰によりて　生くべし　汝ら義の　そなへものを　献（ささげ）て　あしき人は陰府（よみ）にかへるべし　なんじ　身の塵をふりおとせ　人の義とせらるるは　律法（おきて）の行為（おこなひ）によらず
シテ　：善をなす者
地謡　：善をなす者　一人だになく　咽（のど）は　開きたる墓　その口は詛（のろひ）と苦（にがき）とにて満つ　おそるるなかれ　われ　なんじの名を　よべり　なんじは　わが有（もの）なり　水中（み

づのなか)を　すぐるとき　ともにあらん　河のなかを過ぐるときは　水　なんじの上に　あふれじ　なんじ火の中をゆくとき　焚るることなく　火炎(ほのほ)また燃えつかじ

シテ　：願わくは

地謡　：願わくは　ルーテル　おのれの　功名にあらず，アブラハムの信仰に依れり　さあらば　十方恒沙の諸神　ルーテルに力を合わせて賜びたまへとて　十字架を捧げつつ　天を仰ぎ　頭を地につけ　骨髄の丹誠　聞き入れ納受せしめ給へや

シテ　：謹上再拝

シテ　：インストラクティオ　スンマリア

シテ　：いかにやルーテル　いかにやルーテル　頼めや頼め　ただ頼め

シテ　：ルーテル　聖壇の上に上がり

地謡　：ルーテル　聖壇の上に上がって　三拝の膝を屈し

シテ　：ちやうと打つ

地謡　：ちゃうちゃうと打ち響きたる雷(いかづち)の音，天地に響きて　おびただしや

シテ　：かくて九五カ条　打ち立てまつり，表にルーテルと記したり
神體時の弟子なれば
ルーテルとは
これなれや

シテ　：我　ここに立つ　神よ加護のあらんことを
アーメン

地謡　：インダルジェンティス(免罪符)，悪魔世に満ちて　襲いせまるとも　この世の君　狂いたてど　何を　恐れん　頼むべきは　われにあらず　ただ神の恩寵のみ
万軍の主なる神　万軍の主なる神　神の国は　なおわれのもの[4]

語り2(上村)

シテ　：もろもろの神の神に感謝せよ　その憐憫(あはれみ)は　とこしへに　たゆることなければなり

地謡　：もろもろの主の主にかんしゃせよ　その憐憫(あはれみ)はとこしへにたゆることなければなり
ただ　独り　おほいなる　奇跡なしたまふものに感謝せよ　そのあはれみは永遠(とこしへ)にたゆることなければなり

シテ　：汝をつくれるもの

地謡　：汝をつくれるもの　今かく言い給ふ　おそるるなかれ　我　なんじを　贖(あがな)へり
我　なんじの名をよべり
なんじら　義のそなへものを　献(ささげ)て　なんぢ　身の塵をふりおとせ

シテ　：神はわがやぐら

地謡　：神はわがやぐら　ちからなる神は　わが強き　やぐら　悩み苦しみを　防ぎまもりたもう　悪しき敵の　手だて尽し　攻めきたるも　なにか　恐れん　神ともにいませば[5]

**注**

1) ホーエンツォレルン家のアルブレヒト大司教の名と紋章をもった一般指示書。この指示書がテッツェルをして贖宥券の誤った説教をさせる源泉とルターは知るに至って，沈黙を破った。
2) 以下謡曲「小鍛冶」の引用により構成した。
3) 教会讃美歌450番より。
4) 同上
5) 同上